

## 思無邪

任期もおしつまり、木下知事にとって一日一日が愛惜にたえないものようであった。その頃、福祉関係代表者たちが知事を囲む懇談会を計画したが、知事はていねいに断られた。ふしぎに思つて、夫人にうかがつてみた。

「木下は謝恩会のようなものには一切出ないようになっているようです。たぶん木下個人というものが混じるからでしょう」

最後のつめをじぶんに納得いくものであらしめたいという願いを、夫人も十分感じとられている面持ちで語られるのであった。その日は新築なつた原爆センター店開きへのご出席をお願いするのが用件であった。全くの内々の行事で、従業員を励ますのが目的であることもつけ加えた。当日はご夫婦揃つて参列された。原爆センターは大分県が被爆者にさしのべている唯一の窓口であると思つていたので、嬉しくてならなかつた。

お二人だけがお客さんなのに、ていねいな祝辞を大まじめにのべられるのである。そして2時間もおられて様々の話を聞かせてくださった。

「君、政治も私心がなければ、予想もしない面白いことが出てくるものだよ」ともいわれる。「私は運がよい」

とはこの人の口ぐせだ。たしかに運が大きく人を左右する。しかし、運をつかまえるのはその人の実力でもある。知事はいろいろの力をもっている。他の政治家よりすぐれている能力は、何といつても私心を自分に向かつてふり分けける力をたえず努力しているということである。

知事は首尾一貫しない理くつをその場その場であることがある。その矛盾を指摘したら、「わしは弁護士だから三百代言みたいなのがあるよ」と笑っていた。うそも方便を、「思無邪」で統卸している自信があつてのことのようだ。

プラトンは哲人こそ政治家に最もふさわしいものとした。哲学とは自己を内省しやまぬ学問、哲人とは私を鋭く切り捨てる習練をやめぬ人間のことである。

知事に15年おつかえして、一度だけほめられたことがある。第1回移動県庁を国東方面で開いたが非常な成功だった。竹田津の夕焼け空の下で、大きな手で私に握手されて、ありがとうといわれた。顔は紅潮していた。

しかし、それ以外はほめられたことも、叱られたことも全くおぼえていない。勝手に、自由に仕事をせよといつておられるような仕打ちであった。私は全く安心しきつて仕事をした。働くことがひたすら楽しいという時代

である。

人のおもわくを気にせず、よいことなら一刻も早く実行しようという構えは、役人仕事の中で、いつのまにか私を異質のものにしていったようだ。遅刻せず、仕事せず―この吏道が余りにも愚行にみえて仕方がなかった。

2年前、貧困者に診療拒否した医師と私が争ったことで知事に報告したら、ここぞとばかり長い説教を始めた。来客で中断された。私は待ちきれず退出した。再度呼びだされて説教のやり直しという念の入れ方である。

「君が今の医師に対して、そういう手段に訴えねばききめがないという考えは分かる。だが、君はもつとさりげなく、浴衣がけで歩くようにはなれないかね。かみしも着けて仕事をするからこそ、あちこちで茨にひっかかるのだ」

私は正しいことをしているのにと思うだけだったので、ただやつと一札をするだけで知事室を出た。理論としては理解していたつもりでも、感情では納得がいつていなかったのだ。

しかし、その言葉がどんなに私のために考えられたものであるか、いまお別れして分かるような気がする。茨にひっかかり、傷ついてしか、こたえないこの愚かさを何としよう。

じぶんでは仕事をしているつもりでいた。しかし、本

当は仕事として通してもらっていたにすぎないのではないだろうか。

4年前のこと、知事あてのぶ厚い投書が私のところに回されてきた。「金銭についてははつきりさすこと、木下」と表に朱書されている。内容は私の仕事上の非難を目的としていた。知事はそれには目をくれず、お金の件だけを気にしているのに私は感動した。

「お金については投書のいう通りです」とはつきり肯定した。私が責任者であった行事に数千円の寄付がなされた。その金は寄付の目的通りにつかわれず、当の寄付者が要求していた知事杯の代金になって、知事賞が与えられたことを非難しているのである。

「吉田君、この人がそうというのはないが、金をやっておいて、人を試す者がいるものだよ。世の中は広いよ」

暖かい人間の心を、しくじりを通して感じることでできたことを、しみじみ私は喜んだ。

いま思い出しても恥ずかしいことがある。10年前のこと。知事の3選不出馬が信じられ、某紙が不出馬の材料を書き立てていた頃、血気にはやる者10余人に促されて、私たちは夜、公舎におし入った。大分県のために出馬を要請した。その夜は玄関外で座り込む心の準備はいちようにできていた。

「知事さん、私達がついています」

ふみつけられても声さえ出しえぬ非力なこの連中の不遜な言葉に、何と知事は涙ぐんでいられるではないか。夫人も同じく白いお顔を紅くされている。

もう多くを聞く必要はなかった。私達は心躍らせつつ「ありがとう」という知事の言葉を背にした。その時の若者たちも40歳をすぎ、今も私を励ましてくれる。

この2月、夫人は結婚する長男のためにお祝いをもつてこられた。恐縮しながら知事にもお礼を申しあげた。「あの子は、以前知事さんに就職の紹介状を書いていたことがありますが」とつけ加えた。

「ああ、あそこよりは今の所がよかったよ」と返事された。よくおぼえておられたのだ。

お祝品ののし紙「寿 木下郁」の墨書が余りにみごとであったので、額にいれて掲げた。

(1970年ごろ県厚生部次長時代に 出典は不明)